

---

# 英雄叙事詩とシャマニズム

## —中央ユーラシア・テュルクの伝承から

坂井弘紀

### —要旨

テュルクの口承叙事詩には、「最初のシャマン」とされるコルクトをはじめ、シャマンがしばしば登場したり、『エル・トシュテュク』に見られるように、英雄叙事詩の主人公にシャマンの姿が投影されていたりする。英雄の愛馬が八本脚であると暗示されることは、世界各地に見られるシャマン的典型的「八脚馬」と見なすことが可能であり、また、叙事詩で馬の毛を焼く場面からは、シャマニズムの呪術で呪的動物を呼び起こす儀式を読み取ることができる。古来のテュルクの伝承では、大地の中心にある、天空までそびえ立つ世界樹が描かれ、そこからはテュルクの聖樹信仰を見ることができる。また、本来シャマンを意味していたバクスという言葉が、のちに叙事詩の語り手を意味するようになったのは、シャマンの言葉が英雄叙事詩へと発展する一方、イスラーム化にともなって、バクスが預言や託宣を行う機会が減少した結果、叙事詩語りとしての役割が重視されたためと考察される。

### はじめに

中央ユーラシアには多くの宗教・信仰が伝えられてきた。この地では、ゾロアスター教をはじめ、仏教、マニ教、キリスト教、イスラームなどが信仰されてきた。このことは、中央ユーラシアが「文明の十字路」であったことをまさに示すものであるが、それらの中には、仏教やゾロアスター教、マニ教のように、この地ではすでに廃れてしまったものもある。中央ユーラシアのテュルクの人々は様々な信仰をもっていたが、そのもっとも古いものはテングリ（上天神）信仰やそれと深くかかわるシャマニズム<sup>(1)</sup>である。シャマニズム的世界観は、彼らが長い年月をかけて伝えてきた口碑、とりわけ英雄叙事詩に反映されている。「ユーラシアの口承文芸なканずく英雄叙事詩は人類の精神世界を築いてきた想像・シンボリズム・宗教的観念を解明するうえで限りなく大きな可能性を秘めている」<sup>(2)</sup>のである。本稿では、英雄叙事詩とシャマニズムの関係について、中央ユーラシアのテュルクを例に論じていきたい。

## 1. 英雄とシャマン

シャマニズムとは、神霊・精霊・死霊などの霊的存在と直接接触し、交流することにより、託宣・予言・卜占・治病・祭儀などを行うシャマンを中心とする呪術・宗教的形態である<sup>(3)</sup>。シャマンは霊的存在と共同体の人々を仲介する役割をもち、人々に霊界・異界から受け取った言葉を伝える。シャマンが霊的存在と交流する方法は、守護霊などの助力を受け、自分の魂を霊界・異界に飛翔させる脱魂型と霊界・異界の精霊を呼び寄せ、自分の体に憑依させる憑霊型との二つがある。中央ユーラシアのテュルク民族にはその両者が存在していたが<sup>(4)</sup>、脱魂型が多く観測されている。突厥、すなわち古代テュルクでは、「鬼神を敬い、巫（シャーマン）を信じ」ていた。この鬼神とはもろもろの神霊・精霊のことである<sup>(5)</sup>。

これまで知られる限り、テュルク系の言語でシャマンを表すもっとも古い言葉は、カム qamである。テュルク系の古代ウイグル（回鶻）について記した中国史書『新唐書』には、「巫のことを甘という」<sup>(6)</sup>とあり、カムは「甘」の字で当てられている。11世紀にマフムード・カーシュガリーが著した『テュルク辞書集成』には、カムという言葉は予言者・占い師、シャマンを意味するとある<sup>(7)</sup>。プラノ・カルピニのジョン修道士の旅行記には、キプチャク草原で権勢を誇った、テュルク系キプチャクの信仰について、「占い・前兆・予言・妖術・呪文を非常に重視し、悪魔どもから答えを得ると、これは、神が自分たちに語りかけているのだ、と信じます」と伝えられ、この神をカムと称したと記される<sup>(8)</sup>。もちろん、このカムは神ではなく、神の言葉を預かるシャマンのことにほかならないのだが、修道士にはそれが理解できなかったのだろう。このような西洋人による誤解は、ルブルクのウィリアム修道士の旅行記にも見られ、君主の称号カンと占者を同じ意味としている<sup>(9)</sup>。これも正確なものではないが、音の類似に加えて、ハンがカム（シャマン）そのものであったとする考え<sup>(10)</sup>とも無縁ではあるまい。なお、アルタイやハカス、トゥバなど南シベリアでは、現在でもシャマンをカム／ハムという。シャマニズムが今でも強く残る南シベリアで、シャマンを示す、この言葉が使われていることは、象徴的でもある。カムは



図1 コルクト（想像図）

qamda-（アルタイ語）、qamna-（ショル語）など「シャマンが儀式を行う・呪術を施す」という意味の動詞に転じた。9世紀頃に記されたと考えられる『占いの書』İrq Bitig には、「男が狩りに出た。山で呪術を行った。Är abqa barmysh taGda qamlamysh」とこの動詞が見られる<sup>(11)</sup>。ロシア語の動詞 камлать（シャマンの儀式を行う、占う、治療する）もこの語から生じたことは間違いはない。

ところで、中央ユーラシアでは、最初のシャマンは、コルクトという人物であったと伝えられている。

コルクトの名は、16世紀にオスマン帝国で採録され、文字で記録された英雄叙事詩『デデ・コルクトの書』の主人公としてよく知られる。この叙事詩は次のように歌う。

(コルクトは) オグズ<sup>(12)</sup>の無謬なる賢者であった。何を言ってもそのとおりになった。目に見えない世界についてさまざまな知らせを告げた。至高の神は彼の心に靈感を賜った。(中略)そして、さらに多くのこれに似た言葉を彼は伝えた。コルクト・アタはオグズの厄介事を解決した。どんなことであっても、コルクト・アタに相談せずには行われなかった。彼が何を命じても受け入れ、その言葉に従って行動したものであった<sup>(13)</sup>。

ここにある「目に見えない世界」とは霊界・異界にほかならず、そこからの知らせを人々に告げたり、神が彼に靈感を賜ったりする姿は、まさしくシャマンそのものである。

中央ユーラシアに伝わるコルクトは、死とは何か、死から逃れることはできないのかを熟考したと伝えられる。結局死から逃れられないと悟ったコルクトは、コブズという弦楽器を考案し、シル川の水面に絨毯を浮かべて、演奏を続ける。「死」はその音色を恐れ、コルクトに近づけないが、ふとまどろんだ隙にコルクトは水蛇にかまれて命を落とした。コルクトは死んだが、彼の作った楽器コブズと曲の数々はその後も生き続けたと伝わるのである<sup>(14)</sup>。死について説く彼の姿は『デデ・コルクトの書』にも見られる。

我がコルクトがやって来て、愉快にコブズ<sup>マ</sup>を弾いた。(中略)「どこか、私が語ったベグなる勇士たちは、『この世は私のもの』と言った者たちは。死は奪った、地は隠した。かりそめのこの世は誰に残されたのか。移り変わりのこの世は。最後が死であるこの世は」。つまりところ長き寿命の果ては死である。最後は別れである<sup>(15)</sup>。

このように、コルクトにはシャマンの性格とともに、真理を人々に説く賢者・哲人の特徴も認められるのである。

また、英雄叙事詩『アディル・スルタン』には、占い師、すなわちシャマンと考えられる人物が大きな役割を果たす。主人公の勇士アディルが死ぬ夢を見た彼の母は、占い師に解釈を求める。占い師は、彼女を気遣い、無事でいるとの解釈をするが、彼は真実を見抜いていた。アディルは死んでいたのである<sup>(16)</sup>。夢は脱魂型の異界飛翔とつながるものと考えられるが、この場面もまたシャマニズム的世界観の表れであるといえよう。

コルクト伝承や『アディル・スルタン』のように、シャマンが明確に登場するテュルクの伝承は必ずしも多くはないが、主人公の行動にシャマンの姿を見出すことができる伝承は少なくない。クルグズの英雄叙事詩『エル・トシュテュク』やカザフの英雄譚『エル・トスティク』はその好例である。この物語はシャマニズム的要素に満ち、主人公の行動や役割はシャマンの姿と重なり合う<sup>(17)</sup>。主人公は、妖婆ジェルモグス<sup>(18)</sup>と戦い、逃げる彼女を追いかけて地下世界に赴く。そこで仲間の助力を得ながら、敵を倒したあと、大地の中央

に生える木にある巣の中の鳥の雛を狙う蛇を殺した功績で、雛の親鳥に乗って地上に帰ってくるのである（叙事詩『エル・トシュテュク』については、本稿末に付したあらすじを参照のこと）。英雄が地下世界に落ちて、また地上に現れ、敵と戦う場面は、シャマンが儀式で、天空や地上、地下を巡り、ジン<sup>(19)</sup>たちと戦うという世界観に等しいものと理解される<sup>(20)</sup>。

『エル・トシュテュク』において、まず注目すべきは、主人公が地下世界に赴く場面である。トシュテュクは自分のヤスリを取った邪悪な老婆ジェルモグスを追いかけて、地下世界に入る。

ユルタ（天幕）のような大きな黒い石を蹴ると

老婆は地下に入ってしまった。

駿馬のチャルクイルク馬は

歯を食いしばりながら

地下の世界に入ってしまった。

トステュクが地下の世界に降りたとき、

地下の世界はぐらりと揺れた。<sup>(21)</sup>

ジェルモグス・ケンピルは中央ユーラシアで信じられていた超自然的存在で、蛇の姿をはじめ、様々な姿であるが、多くは老婆の姿をとる。口承文芸では、悪行を働く様が多く伝えられるが、この存在は母性庇護の信仰に由来し、女シャマン・女魔法使いや火の主、「死の国」の領主・見張りの機能をもつと指摘される<sup>(22)</sup>。『エル・トシュテュク』の上記の場面では、とくに異界との見張りの機能が認められるとともに、異界へと誘う導き手としての役割が明らかである。シャマンは、ジンやペリなどの補助精霊の援助を得ることで、儀礼を司る。本来、ペリやジンは人間に害悪や災厄を及ぼす邪悪な存在であるが、シャマンの儀式においては、彼らの助けがなければ、異界・霊界に旅することができない。『エル・トシュテュク』で、ジェルモグス・ケンピルを追いかけて地下世界に行く英雄は、ジンやペリとともに異界訪問をするシャマンを模したものと考えられるのである。ジェルモグスについては、父が息子を彼女に渡すことや主人公が彼女から逃げることは、イニシエーションの伝統の概念で、ジェルモグスが父から息子を要求する理由は、子供から成人になり、勇士になることを求めるという風習に基づくとの指摘もある<sup>(23)</sup>。

またこの物語では、地下世界で旅する英雄を助ける「仲間」たちの存在も重要である。カザフ版では、「早足」・「近耳」・「怪力」・「大飲み」・「遠目」など、それぞれ固有の特技をもったキャラクターが主人公の仲間となり、ともに旅する<sup>(24)</sup>。彼らは、主人公の来訪を知っており、「地上のトスティク<sup>ママ</sup>が地下に落ちてきたと聞いて、彼の仲間になろうとやってきたのだ」といって、主人公の仲間になるのであるが、主人公を助ける彼らの姿や働きも、シャマンの援助者である精霊、ペリやジンなどのものと重なり合う。地下世界で、主人公は様々な課題を与えられ、それらを克服するのだが、それはシャマンが病気やけがの

治療や占いなどを行う様子を髣髴とさせる。

さて、敵を倒した主人公は、地下世界から地上世界に戻るが、その場面からもシャマンの姿を見て取ることができる。大地の中心に天空にまで伸びる大樹があり、そこには霊鳥の巣があり、雛がいて、それを狙う大蛇がいた。主人公トシュテュクはこの大蛇を斬り殺すと、その功績を知った霊鳥により地上世界に飛び、帰還する。アルタイのシャマンの巫儀では、シャマンはユルタの近くに、ガチョウを模した案山子を置き、そのガチョウに乗り、まるで空高く飛ぶように、激しく両手を動かす<sup>(25)</sup>。シャマンは、ガチョウに乗るように振る舞いながら、プラという犠牲馬を追い駆け回るしぐさをする<sup>(26)</sup>。このガチョウに乗って異界・霊界へ飛び立つシャマンの姿は、霊鳥に乗って地上に飛び立つトシュテュクとして英雄叙事詩にはっきりと反映されているのである。「キルギス、カザフの神話はアルタイのシャマンの他界旅行の観念の痕跡が残っている」<sup>(27)</sup>との指摘は正鵠を射ているものと言えよう。シベリアの民間伝承でも、英雄はしばしば鷲その他の鳥によって地下界の深处から地表へと運ばれる<sup>(28)</sup>。このように、中央アジア・シベリア地方の民間伝承には、シャマニズムが強く反映されていることが確認できるのである。

## 2. シャマンと馬

テュルクの英雄叙事詩では、馬が登場しないものはないといえるほど、馬の存在が大きい。これは従来、騎馬遊牧民であったテュルクの人々の培ってきた騎馬文化の表れである。とくに主人公の愛馬は不可欠なキャラクターで、主人公に助言し、彼を救い出す重要な援助者である。英雄叙事詩『アルパムス』の名馬バイシュバル、『エル・タルゲン』の駿馬タルランなど枚挙にいとまない。

テュルクの口頭伝承では、馬と鳥が同じような意味をもち、またシャマンにとっても、馬は、鳥とならぶ重要な存在である。遊牧騎馬民族にとって、馬は、世俗的にのみならず、宗教的にも、けっして軽視すべからざる重大な意義を有していた<sup>(29)</sup>。シャマンの儀式において、動物の犠牲は欠かせず、「アルタイ系の遊牧民は、ふつう、馬の供物は他の供物に比して値打ちが高いと考えている」<sup>(30)</sup>のである。供犠祭で、シャマンは犠牲の馬を洗い、呪文を唱え屠り、竿に吊るし、テングリ（天・神）に捧げる<sup>(31)</sup>。

鳥に乗り、天界への飛翔を行うシャマンの儀礼については先に述べたが、馬もまた「いろいろの脈絡でエクスタシー達成の手段としてシャーマンが使用する」<sup>(33)</sup>ものである。「馬は、トランスや、魂を禁じられた国へエクスタシー的に飛翔せしめることを促



図2 シャマンの儀礼に用いられる馬の犠牲<sup>(32)</sup>



進する」<sup>(34)</sup>。馬は、神秘的な旅を可能にする「自己超脱」の手段として用いられ、天空を飛翔して、シャマンを天界に達せさせるのである<sup>(35)</sup>。エリアーデが「俗界突破」の言葉で示す、異界への移行に欠かせない馬は、『エル・トシュテュク』においては主人公の愛馬チャルクイルクである。トシュテュクが異界に入るときに、乗っていたチャルクイルクは尋常ではない特別な馬である。カザフに伝わるヴァリエントでは、当初トシュテュクは、六脚のまだら馬と七脚の鹿毛馬に乗っていたが、主人公の賢妻ケンジェケイの次の助言により、チャルクイルクを選ぶ。

雌馬の生んだ一歳馬や六本脚のまだら馬には、  
「駄馬では釣り合いません」といって、  
ケンジェケイは乗せなかった。  
老いた雌馬の一歳馬や七本脚の栗毛馬には  
「駄馬では釣り合いません」といって、  
ケンジェケイは乗せなかった。<sup>(36)</sup>

そして英雄のために選ばれたのが、これらの馬を上回る能力をもつチャルクイルクなのである。ここで注目したいのは、チャルクイルクが六本脚のまだら馬でも七本脚の栗毛馬でもないという点、すなわち、主人公の愛馬が、これらの馬よりも優れた「八本脚の馬」であると暗示されている点である。テュルクの文化では、3, 7, 9, 40などは聖数として多用されるが、8はあまり見られない。それでは、なぜ主人公の駿馬は8本の脚なのであるのか？この「八脚馬」については、10世紀頃に古代テュルク文字で記され、シベリア・イエニセイ河流域に残された古代テュルク文字による碑文（以下、イエニセイ碑文）が参考になる。イエニセイ碑文には「八本脚の財産（家畜）säkiz adaqlıy barım」という語句がしばしば見られる<sup>(37)</sup>。この言葉の解釈は、前後関係からも難しく、「8本脚の家畜」や「満腹の家畜」（マロフ）、「8頭の奉献動物」（ヴェムベリ）、「動物と四輪車」（オルクン）、「死体を埋葬地まで運ぶ馬車」（ブロッケルマン）、「肥えた家畜」（アマンジャロフ）など諸説あるが<sup>(38)</sup>、護雅夫は「barın（「財産（家畜）」）の語は、at（「馬」）の語と同義に用いられたと考える。要するに、säkiz adaqlıy barın とは「8本脚をもつ馬」を意味するのである<sup>(39)</sup>と、「8本脚をもつ馬」と解釈している。筆者もこの見解に同調したい。護はさらに、エリアーデの「八脚馬はシャーマンの典型である」との見解を参考に、この「8本脚をもつ馬」が「すぐれてシャーマン的な馬」、「シャーマンの典型」とであると指摘する<sup>(40)</sup>。「八脚馬」は、ブリヤートに伝わる伝説にもその姿を現す。

女がその第二の夫として、あるシャーマンの祖霊をえらび、この神秘的な結婚をする  
と、彼女の馬飼育場にいる一頭の雌馬が、八脚を持つ子馬を生む。地上の夫はその脚  
の四本を切り落とす。『ああ、これは私が女巫のようにこれにのりなれていた小馬だっ

たのに！』と叫んで彼女は大空を飛び越えて見えなくなり、その後、ほかの村に居を定める。彼女はのちにブリヤート族の守護霊となった<sup>(41)</sup>。

「八脚馬」はテュルク・モンゴル系以外にも知られ、「インドのいくつかの先住民族は、死者を馬に乗った形で表現する（中略）死者はそこへ八脚の馬によってはこばれるのである」<sup>(42)</sup>。このほか、北欧神話の神オーディンの馬スレイプニルが八本の脚であることも注視すべきである。スレイプニルは、オーディンや他の神々を乗せて、冥界に赴く。スレイプニルとチャルクイルクは異界に主を乗せて移動する点で一致する。

八本の脚をもつ馬というのはすぐれてシャーマン<sup>マ</sup>的な馬なのであって、これはシベリア諸民族やその他の民族（例えばムリア人）の間にも見られるが、その場合、必ずシャーマン<sup>マ</sup>のエクスタシー体験との関係において出てくるのである<sup>(43)</sup>。

イエニセイ碑文や『エル・トシュテュク』に見られる「八脚馬」はシャマニズムと深い関係をもつ特別な馬なのである。ちなみに、ロシアの物語「エルスラン・ラザレヴィチ」において、皇帝が乗る馬もまた「八脚馬」である。この物語は、イランの有名な『王の書』（シャー・ナーメ）に記されるロスタムにまつわる話であるが、イランから中央ユーラシアのテュルク（キプチャク）に伝播し、そこから「八脚馬」のモチーフとともにロシアに伝わったとの説がある<sup>(44)</sup>。

ところで、シャマンの巫儀において、馬そのものが用いられなくとも、焼かれた白い馬の毛、あるいはシャマンが座る白い馬皮を通して、それは象徴的に利用され、馬の毛を焼くという行為は、シャマンを他界に運ぶべき呪的動物を呼び出すのに等しいと指摘されている<sup>(45)</sup>。テュルクの英雄叙事詩では、主人公が愛馬の毛を燃やしたときに、その馬が主のもとに馳せ参ずるというモチーフがしばしば見られる。バシュコルトの英雄叙事詩『アクブザト』では、馬が主人公に「その手に刀を握るとき、私の尻尾の毛を焦がせば、あなたのそばに駆けて行きます。あなたの片腕の馬となります」と言う。戦いの前に毛を焦がして、馬を呼び出す勇士の姿は、馬の毛を焼いて、他界に運ぶべき呪的動物を呼ぶシャマンのアナロジーである。英雄譚の勇士の戦いは、シャマンの呪術に通じるものと感じられる。なお、馬のかわりに鳥が同様の役割を果たすこともある。『エル・トシュテュク』では、霊鳥カラクシュが主人公に言う。

わが子、トシュテュクよ、  
もしも困ったことがあったら、  
この私の羽を  
火で焦がしなさい、トシュテュクよ。  
何があろうとも、私は参りましょう。<sup>(46)</sup>

その後も、アルプ・カラ・クス鳥は、友人となったトスティクが困難に陥ったときに、彼を救うために現れる。苦境に立ったときのために、トスティクに自分の羽根を授け、この羽根に火をつけると彼のもとに現れるというのである。叙事詩に見られる、馬や鳥の毛や羽を焦がすモチーフは、シャマンの儀式を反映したものだ。

### 3. 世界樹

叙事詩『エル・トシュテュク』において、「八脚馬」チャルクイルクの主トシュテュクは、大地の真ん中に生え、天空にまで伸びているチュナル・テレクという木の下にやってくる。この木には、魔蛇アジュダルがおり、木の上にいる聖鳥カラクシュの二羽の雛を飲み込もうと狙っていた。トシュテュクはアジュダルを斬り殺し、雛を救う。この功をもってトシュテュクはカラクシュ鳥に感謝され、返礼としてこの聖鳥に乗って、地下世界から地上世界へと帰還する。世界樹の両極にいる霊鳥カラクシュと魔蛇アジュダルは、「善と悪」という二元論的な対立項を示している。この場面に見られる樹は世界の中心にある「世界軸」であり、異界と異界を結び付ける役割も担っている。世界樹は異なる世界への扉なのである。この世界樹は、古くからテュルクで信仰された聖樹を反映したものである。カザフには、聖なる世界樹バイテレクは、大地と天のへそにたった一本だけ生えており、その頂は天上に通じ、その根は地下につながっているという次の伝承がある。目には見えないこの樹は、

地上に暮らす、すべての人間の生活の兆候である。地上に暮らしている人はみな、この聖なるテレクにある葉が弾けたときに誕生する。その葉は揺れながら育って、大きくなり、成熟する。その葉が時季外れに黄色くなれば、深い悲しみに出会う。その葉が枯れて、乾けば、その人は年老いる。その葉が枯れて、大地に落ちれば、不幸な目にあう（死ぬ）<sup>(47)</sup>。



図3 木の枝に結び付けられた布きれ（バシュコルトスタン共和国）

このような信仰にもとづき、樹にまつわる儀礼も行われてきた。草原の樹を信仰の対象とし、人々はそのそばに泊まったり、その枝に布きれを結び付けたり、犠牲として家畜を屠ったり、あるいは先にもみたように、馬の鬣を捧げたりする<sup>(48)</sup>。

神話的聖樹バイテレクは、天上界、地上界、地下界がそれぞれ9層あるいは7層などからなるという多層的世界観に基づき、



その根は地下世界、樹冠が中の世界、枝や葉が上方世界を示すと考えられる<sup>(49)</sup>。バイテレクは字義的には「バイ（豊かな）テレク（ポプラ）」の意味であるが、「命を与えるもの」「最初の命」を意味するとの説もある<sup>(50)</sup>。テミル・テレク（鉄のポプラ）とも言われるこの樹は、たとえば、アルタイの英雄叙事詩『マーダイ・カラ』では「百の枝の永久のポプリは、月と太陽に照らされて、黄金に輝きながらそびえ立つ」と描写される<sup>(51)</sup>。なお、カザフスタンの首都アスタナの中心部にそびえるシンボルタワーの名称は、バイテレクという。古来の信仰にもとづく世界樹が、現代的な姿でそびえ立っているのは、この神話的樹木がこの地域において変わらず大きな意味をもっていることを示すものとして興味深い。

なお、『エル・トシュテュク』では、トシュテュクの敵ジェルモグスはチョロク・テレクという木の根もとにおり、宿泊することを禁じられたこの木の下に、トシュテュクの父は宿泊してしまい、ジェルモグスに捕えられる。チョロク・テレクは、トシュテュクを救った聖鳥カラクシュの巣があったチュナル・テレクと正反対の特徴をもつ木と説明されるが<sup>(52)</sup>、これも善悪の二元論の表象であると理解できるかもしれない。

聖樹の重要さは、中央ユーラシアのシャマンの儀礼にもはっきりと見ることができる。アルタイ地方の例を挙げよう。

夕方、太陽が沈むと、最初の準備が行われ、シャマンの儀式のための場所が選ばれ、犠牲が選ばれる。とくにフェルトと絨毯で覆われた、新しいユルタが設置される。ユルタの中央には刈り取ったばかりの青い白樺が取り付けられ、その頂はユルタの上部の穴から外に出されている。白樺の枝は下から刈り込まれ、上に小箒のようにして、旗の代わりに布が取り付けられる。白樺には9つの段が刻まれ、この段をタブトゥという。このユルタは通常よりも大きく、高く作られ、その扉は東に向けられる<sup>(53)</sup>。

なお、このようなアルタイにおけるシャマンの儀礼は、ブリヤト・モンゴルにおけるシャマンの入巫儀礼と酷似する。その儀礼は次のように行われる。

がっしりした樺の木が、根が囲炉裏の中に、頂が煙出し穴から突き出るようにユルタの中にしつらえられ、その木に、シャマンの候補者が剣を手に武装して、よじ登り、その頂まで達すると、煙出し穴から神々の助力を懇禱して叫ぶのである<sup>(54)</sup>。

白樺などの聖樹がシャマンの儀礼に不可欠であることは、テュルク・モンゴルのシャマニズムにおいて共通するのである。このような樹は世界の中心を占める宇



図4 カザフスタンの首都アスタナのシンボル、バイテレク・タワー

宙樹・世界軸の象徴で、この樹に登ることで、シャマンは「中心」へのエクスタシーの旅をする<sup>(55)</sup>。「宇宙軸をつたって天上に昇るということは、世界的かつ古代的観念」<sup>(56)</sup>であるが、シャマンの儀式においてきわめて重要な動きなのである。

『周書』によると、古代テュルク（突厥）では次のようにして君主を選んだという。

大樹のところに行き、樹に向かって跳躍して、いちばん高く跳んだものを（君主に）立てようと約束した。阿史那（アシナ）<sup>(57)</sup>の子は、年は幼かったが、いちばん高く跳んだ<sup>(58)</sup>。

ここから想起されるのは、シャマニズムにおいて樹木や柱を登っていく儀礼である。樹に向かっての跳躍は、シャマンが樹を高く登り、「天界の上層に赴く」こととつながるものである。天界上昇はシャマンの能力次第であり、力あるシャマンは第十二天、あるいはさらに上天まで登っていくことができる<sup>(59)</sup>。大樹に向かって跳躍し、最も高く跳ぶことは、天高く上昇する、能力あるシャマンになぞらえたものと考えられ、君主となるための一番強い力をもつことを意味するものである。この儀礼は、シャマニズムの祭儀、とくに成巫式を踏まえているもので、このことから、突厥の君主は本来シャマンそのものであったという説がある<sup>(60)</sup>。シャマンがテングリの幸霊を賜ることやシャマニズムと聖樹との関係を考えてするならば、この考えは十分首肯しうるものである。「（シャーマンは）あくまでも共同体社会の一員でありつつ、あるときはそのリーダーともなりうる存在」で、「それぞれの社会できわ立った人物」と見なされていたのである<sup>(61)</sup>。さらに言えば、古代テュルクの君主と同様に、人々を率い、共同体の運命を左右する英雄たる勇士もまた、シャマン、もしくはそれに比類する存在であったのではないか。叙事詩の主人公にシャマンの影が透けて見えるのは、そのためでもあるかもしれない。

古代ウイグルの始祖神話においても、上天信仰と樹木崇拜、とりわけ生命の樹としての性格が強く見いだせる。古代ウイグルの神話は伝える。

二本の樹の間の丘に天光が降りて、大きくなり、やがて5つの小屋が現れた。小屋の中には子供がいて、管で哺乳されていた。外に出た子供たちに人々は両親が誰か尋ねると、二本の樹を示した。人々は樹に敬意を示し、5人の子供のうちの一人ブクを君主とした<sup>(62)</sup>。

神話中のブク・ハンとは遊牧ウイグル王国の3代目の君主を指し、この伝説はブクを顕彰するものであるものと考えられている。この二本の木が君主の祖であるという伝承が樹木信仰に基づくものであることは言を俟たない。テュルクの生命樹伝承のひとつとして、みなす好例である。天光が降りる二本の樹は、アルタイの「人間は生まれるときに、われらのウマイ・アナと一緒に二本のブナの木も大地に落ちてくる」<sup>(63)</sup>とする伝承と通底するも

のであろう。

ところで、世界樹バイテレクは北欧神話に見られるユグドラシルとの共通性をもつことがエリアーデによって指摘されている。

古代ゲルマン人の宗教と神話のなかには、北アジア・シャーマニズムの概念や技術に匹敵するものがいくつかある。オーディン—恐るべき君主であり、偉大な呪術師—の姿やその神話には不思議に「シャーマンの」特色がいくつか認められる。例えばオーディンは、ルーン文字の秘密を知るために、一本の木にまる一週間宙づりになっている。何人かのゲルマン学者は、そこに一種のイニシエーション儀礼を認めようとしている。(中略) オーディンが自分自身を「吊るした」木は宇宙の木、イグドラシル (Yggdrasil) に他ならぬのであり、ちなみにこのイグドラシルという名は「オーディン (Ygg) の騎馬」を意味する。(中略) オーディンはまた彼の馬をイグドラシルに繋ぐのであり、このような神話のテーマの起源が北アジアおよび中央アジアにあることは周知のとおりである<sup>(64)</sup>。

北欧神話のこのようなテーマの起源が北・中央アジアにあるかどうかは、さらなる検討が必要であるが、この点が、オーディンの八脚馬スレイプニルとならんで、ユーラシアの神話世界を考える上できわめて重要なポイントであることは疑いのないことである。

#### 4. 世界の層と地下世界

前章で見たように、中央ユーラシアには、世界が多層からなるとみなす世界観がある。基本的には、天上界、地上界、地下界の3つの世界からなる世界観である。上述のように、世界の中心には宇宙軸・世界樹が生えており、それぞれの世界や層を結び付けている。こうした垂直多層的世界観によると、3層・7層・9層など多層からなり、それぞれの層に天神テングリが住むとされる。中央ユーラシアには、こうしたテングリ信仰に基づいた伝承が数多く伝わる。たとえば、アルタイでは、次のように伝えられている。「(テングリの) カイラ・カン」は天空の第17層に住み、宇宙の運命を司ってきた。カイラ・カンから3つの上天神が生まれた。バイ・ウルゲンは第16層の金の玉座におり、強力な力をもつクサガン・テングリは第9層におり、全知全能のメルゲン・テングリは天空の第7層に住む<sup>(65)</sup>。あるいは、「空の第5層に至高の創造の神「クダイ・ヤユチ」と呼ばれる創造主が住む」<sup>(66)</sup>、「空の第5層には、子供を創造する強力な精霊ヤユチが住む」<sup>(67)</sup>。

このような垂直多層的世界観は、シャーマニズムの儀式ともきわめて密接に関わる。別の伝承によれば、「(天の) 第7層に太陽の母 kun ene、第6層に月の父 ai ata が存在する」<sup>(68)</sup> と信じられているが、シャーマンの儀式における天界上昇においても、この信仰が反映される。「カム (シャーマン) は儀式において、第6層に達すると、そこに住む月に祈りをささげ、第

7層でそこに住む太陽に、月と同様に祈りをささげる」<sup>(69)</sup>。先に見た、アルタイのシャマンの儀式で用いられる白樺に刻まれた9つの段は、天界の「9つの層」を意味し、第一層（一段）から順に第9層（9段）にまで天界上昇するためにつけられたものである。ここではさらに詳細にシャマンの天界上昇について見てみよう。

カム（シャマン）は軽く会釈し、小太鼓を揺すり、ユルタの真ん中に出て、大胆に勢いよく繰り返して唱え始める。／火とタブトゥの素早く駆けて一回りし、うれしそうに天の第一層に登り、そこで雷鳴や稲妻をまねて、力強く、「シャガルバタ！シャガルバタ！シャハルバタ！」と叫ぶ。そして、（犠牲の）プラ馬を意味する、鞍褥を置いた小椅子に近寄り、座り、こう言う。「第一段に登った。アイ・ガイ・ガイ！シャハルバタ（3回繰り返す）！。第一層に近づいた。シャハルバタ（3回繰り返す）！。段（タブトゥ）の頭によじ登った。シャハルバタ（3回繰り返す）！。満月にまで私は上がった。シャハルバタ（3回繰り返す）！」<sup>(70)</sup>。

続いて、第二層にはこのように昇る。

プラ馬の励ましによって、カムはタブトゥの第2段目に足を置き、それから最初のようにしゃがみ、小太鼓を叩きながら、第二天を開き、跳びあがりながら、叫ぶ。「二番目の底面を私は砕いた。第二層に出た。」二回素早く回って、雷鳴をまねて、カムはこう言う。「第二段に登った。アイ・ガイ・ガイ！シャハルバタ（3回繰り返す）！。第二層に近づいた。シャハルバタ（3回繰り返す）。段（タブトゥ）の頭によじ登った。シャハルバタ（3回繰り返す）。満月にまで私は上がった。シャハルバタ（3回繰り返す）！」<sup>(71)</sup>。

このようにして天を昇り、既述のように、第6層で月に、第7層で太陽にそれぞれ祈りを捧げ、第8層を抜け、ついに第9層に達する。シャマンはそして最高神ウルゲンにまみえ、犠牲を受け取ったかを尋ね、将来についての予言を受け取る。神からの予言を人々に伝えることは、シャマンの主要な役割である。

天上界のように、地下にも独自の世界が広がる。『エル・トシュテュク』の主な舞台の地下世界である。この叙事詩では、地下世界には巨人やハンが暮らす、アルタイの神話では、地下には、邪悪なテングリ、エルリクが住む。エルリクは地下世界の支配者で、上天のテングリ、ウルゲンとは対照的な存在である。

アルタイのシャマンによれば、世界は3つの層、地下世界、地上世界、天上世界から成っている。地下世界の靈魂はコルモス Kormös と、天空の靈魂はクダイと、地上の靈魂はジェル・スーもしくはアルタイという<sup>(72)</sup>。

アルタイの神話では、エルリクが地下世界に落とされたことを次のように描いている。

(エルリクに) 神は「落ちろ、地面の下に落ちてしまえ。あっち側に閉じこもっている。底に落ちろ！地下に引きずられて、そこでおとなしくしている。ずっと月も太陽も光が差さぬようにしてやる。いつか最後の審判で、おまえが善行をしていれば認めてやろう。悪行をしていれば、さらに閉じ込めてやる。そういうことだ」と命じた。エルリクは「死者をみな連れていきたいと思います」と言った。神は「ならぬ。そこに行かせぬ」と答えた。コルモスは「それならば、神様、私には民がいないということになるのですか？私は地下世界に落ちて、たった一人でどうしたらいいのでしょうか？」と訴えた。神は「おまえは私に何を求めているのだ？自分で考えて創ることができるのだから、自分で創れ！」と答えた。エルリクは神に頭を下げて、「ご慈悲を下さるならば、自分で創ります」と言った。神は慈悲を与えた。エルリクは創った。ふいごと火箸を置き、槌で一回叩いた。槌でカエルが一匹飛び跳ねて現れた。もう一度叩いた。蛇が這って出てきた。もう一度叩いた。熊が走って出てきた。もう一度叩いた。イノシシが現れた。もう一度叩いた。魔女アルムスが出てきた。もう一度叩くと、悪魔シュルプスが出てきた<sup>(73)</sup>。

地下界にただ一人落とされたエルリクは、自分で様々な動物や悪魔などを創造した。地下世界は、死者の世界とも描写されるが、このように地下で創造された生き物の世界でもあった。

シャマンの儀式では、シャマンは地下界への下降も行う。地下界下降は天界上昇に比べて、はるかに難しいという<sup>(74)</sup>。シャマンの地下下降の儀式は次のように記録されている。シャマン<sup>(75)</sup>は馬に乗って大草原を横断し、異界への入り口の穴に向かう。シャマンは、「大地の中心」あるいは「大地の煙穴」という地下世界に導く穴に下りる。地下に下りると、シャマンは平原を巡り、海に出る。その海には一本の髪の毛が伸びている。シャマンはこの危険な髪の毛の橋を渡るのである。シャマンは一方から一方へ時折落ちそうになりながら、よろよろ進む。そこでシャマンは、海の底に死んだシャマンたちのたくさんの骨を見つけ、罪びとの魂は一つも、この海を渡ることができないことに気づく。エルリクと会うと、貢物を捧げる。貢物を受け取ると、エルリクはシャマンをウルタの中に入れる。その後、エルリクは祝福の言葉を授け、家畜の子が生まれることを約束し、シャマンにどんな母馬が子馬を産むか、どんな特徴が子馬にあるかを明かす。それからシャマンは喜んで、帰還する。シャマンは、行きは馬に乗ってきて、帰りはガチョウに乗って上昇する<sup>(76)</sup>。

馬に乗って地下界へ降りること、苦難を乗り越えて、地下の王者にまみえ、その祝福を得ること、鳥に乗って地上に戻ることなど、『エル・トシュテュク』との類似点が多い。エリアーデは、馬で地下世界に行き、鳥に乗って地上に戻ってきたことについて、「何だかあ



やしい」矛盾点であると指摘し、「冥界に通じる穴を飛翔して通り抜けるというのは想像しにくいというだけでなく、鷲鳥の背に乗って飛翔することはシャーマンの天界上昇を想起させる」とし、「上昇のテーマと下降のテーマとの間に、おそらく一種の混淆があった」と推測する<sup>(77)</sup>。しかし、このシャーマンの儀式は、トシュテュクが馬で地下界に赴き、霊鳥に乗って帰ってくるというモチーフとまさしく一致している。たしかに鳥は天上界の象徴ではあるが、鳥によって地下界から地上界に上昇することはとくに不自然ではない。鳥は上昇の象徴でもあるからである。それどころか地下界の象徴である蛇を倒し、雛を救った主人公は、話の流れからいっても、鳥の助力によってこそ地上界に戻るべきなのである。『エル・トシュテュク』で主人公は、往路はたしかに馬とともに穴に落ちて、地下世界に行くが、帰路は地下界から天上界にまで伸びる大樹に沿って地上に昇る。想像するに、シャーマンは「冥界に通じる穴を飛翔して通り抜け」て、帰還したのではなく、シャーマンの天界上昇の儀式のように、世界樹を利用して地上界に飛翔して戻ったのであろう。上記のシャーマンの儀式の記録には現れないが、おそらくは世界の中心たる世界樹が地下世界にも通じているという前提があったのではないだろうか。「アルプ・カラクスは媒介者であり3つの世界を結び付けるもの」であるならば<sup>(78)</sup>、聖鳥はその樹に沿って、異界を行き来することが可能であったのであろう。アルタイにおけるシャーマンの儀礼だけでなく、クルグズやカザフの英雄譚においても、馬で地下界に行き、鳥で地上界に戻る様子が描かれていることは、「一種の混淆」などではなく、明確な意味をもった文脈として理解すべきなのである。

## 5. 霊魂について

テュルク・モンゴルのシャマニズムにおいて、シャーマンの「魂」は肉体の外の存在として現れ、ふつう動物の姿をしている<sup>(79)</sup>。テュルク・モンゴル系諸民族の伝承では、常に人間の外に存在する「魂」が語られるが、こうした「魂」は、シベリアの信仰観念では鳥の姿になるのが最も一般的である<sup>(80)</sup>。たとえば、オム川流域のテュルク系バラバ・タタール人の伝承では、ハンの真の魂はうずらの姿である。「7本のバイテレクがあり、その根元に金の水辺があって、その水を飲む7頭のマラル鹿がおり、その中に地面にまで達する腹のマラル鹿がいて、その鹿の腹には金の長持があり、金の長持の中には銀の長持があり、銀の長持の中には7羽のうずらがいて、その頭は金で、尻尾は銀である。このうずらこそ私の真の魂なのだ」<sup>(81)</sup>。叙事詩『エル・トシュテュク』で、トシュテュクが戦う強敵チョユンクラクの魂も、これと類似する鳥の姿である。

私（チョユンクラク）の魂は向こうにある。アルタイクの地にある。

そこには金の泉がある。その泉の中には黄色い魚がいる。

黄色い魚の中には金のサンドウク（長持）がある。

金のサンドウクの中には銀のサンドウクがある。

銀のサンドウクの中には40の黒い小鳥のわが魂がある。<sup>(82)</sup>

トシュテュクはこの鳥の姿をした魂をすべて殺すことで、敵を倒す。体外の魂を生かしたり、殺したりすることが、その魂の持ち主の生死を左右するという考えは、シャマニズムの重要な特徴である。シャマニズムでは、病気の治療法は失われた魂を見つけ出して捕え、患者の体内に戻すということであり、この呪術的治療こそがシャマンの主要な機能なのである<sup>(83)</sup>。なお、魂が鳥の姿をするとする考えは、ユーラシア中央部・東部に顕著であり、たとえば、アムール流域のナナイでは、霊魂は小さな鳥の姿で巨大な樹についているとされ、またエヴェンキでは人が死ぬと魂オミが鳥の姿になって飛んでいくと信じられる<sup>(84)</sup>。『エル・トシュテュク』における、世界樹にいた聖鳥カラクシュの雛も、これらのことと無関係なことではないであろう。

さて、中央ユーラシアでは、魂は3つ、あるいは7つ、9つなど複数存在すると信じられている<sup>(85)</sup>。こうした魂は、生きている間にはふらふらと体を離れ病気を引き起こし、死んでから後は、悪霊に食べられたり、冥界に降りていったりすると考えられていた<sup>(86)</sup>。『エル・トシュテュク』では、名馬チャルクイルクには、8つの魂があり<sup>(87)</sup>、そのうち3つの魂が死んでしまうが、残り5つの魂は生きていたので、この名馬は生き続けることができた。またカザフのヴァリエントでは、この馬には3つの魂があり、二つがなくなっても一つは残っていきだろうと描かれる。

魂は鳥の姿だけでなく、その他の様々な形を取ることもある。種々の動物や魚、炭、石の姿も取りうるが、ここで注目したいのは肺である。『エル・トシュテュク』で、トシュテュクの父は川から流れてきた肺を拾う。その肺はジェルモグスが姿を変えたもので、彼を苦しめ、息子トシュテュクを引き渡すよう求める。川(水)は「あの世」であり、肺は死者の魂であることからジェルモグスは死者の皇帝の番人であるという指摘がある<sup>(88)</sup>。テュルク諸民族の伝統文化では、「水界は地下界と同じく下界であり、死者の国であり、魔者たちの世界である」<sup>(89)</sup>。

## 6. バクスとシャマン

英雄叙事詩とシャマニズムは、これまで見てきたように密接に関連するが、この章では、シャマンと叙事詩の語り手との関係について論じていきたい。先に見たように、英雄叙事詩をはじめ多くの伝承に登場するコルクトは中央ユーラシアの「最初のシャマン」とされる。『デデ・コルクトの書』で弦楽器コブズを奏でるコルクトの姿は、叙事詩語りの姿と正しく重なり合う。現在の叙事詩語りも弦楽器コブズの伴奏で詩を語るからである。

中央ユーラシアで叙事詩語りを示す言葉は、ジュルシュやジュラウなどいくつかあるが、その一つにバクス／バフシという言葉がある。この言葉は、トルクメンやウズベク、カラカルパクでは、語り手や詩人を意味するが、カザフやクルグズではシャマンを意味する<sup>(90)</sup>。

19世紀の記録によれば、カザフのバクスは、病気治療の儀式で、刀を柄まで喉にいれたり、赤熱した鉄に横たわり、斧で自分の胸を打ったりする。また、聖者コルクトの創り出したコブズを伴奏しながら、歌を歌い、「魂」を呼び出す。バクスは、だんだん正気でなくなり、倒れるが、しばらくすると起き上がり、失神している間、「魂」から聞いたことを語る<sup>(91)</sup>。独立後のカザフスタンでも、伝統的な民族文化としてシャマニズムの復興が見られ、たとえば、アルマトゥにある民族医療センターでは、バクスを名乗る民間医師が鞭やナイフをもちいて治療を行っている<sup>(92)</sup>。バクスの語源については諸説あり、サンスクリット語 Bhikshu が語源で「仏教の隠匿者、世捨人、後にはシャマンおよび病気の治療にあたる人を意味した」とするサンスクリット語説<sup>(93)</sup>や突厥の時代にシャマンを意味するようになったとする「博士」に由来するとする漢語説<sup>(94)</sup>、教師・師匠を意味したモンゴル語起源とする説、テュルク系の「bakmak」（見る）を語根とするテュルク語説などがある。

シャマンを意味していたバクスという言葉は、ウズベクやトルクメン、カラカルパクでは、なぜ詩人・語り手を表すようになったのであろうか。シャマンの役割のひとつに、祖霊や死霊を憑依させ、その言葉を一人称で語ることがある。古代テュルク碑文に刻まれた死者や被葬者の言葉が一人称であることは、シャマンの語りに由来するものと考えてよいだろう<sup>(95)</sup>。テュルクの「文学」、ひいては草原の「文学」の源流は、シャマンの口を借りて語った祖霊、死霊の言葉に求めるべきであるとの指摘もある<sup>(96)</sup>。また次のような意見も参考になる。

文学の起源は、間違いなくシャーマニズムとかかわっている。文学を物語や歌としてとりあげれば、その始まりにおいて、物語は神の語る叙事であり、歌は神の言葉の再現であった。神の語る叙事とか神の言葉というのは具体的には、人間が神を装って語るということである。その人間は、神懸かって神の言葉を語る能力を持った「巫」と考えられる。つまり、シャーマンである。シャーマンの語る言葉が文学の起源とも言えるのである<sup>(97)</sup>。

やはり、テュルクの口承文学の源泉をシャマニズムに見出す見解は適切なものであろう。



図5 カラカルパクの叙事詩語り

「中央アジアでは、民衆的な英雄叙事詩がシャマニズム研究の有力な資料たり得」るのである<sup>(98)</sup>。古代テュルクにおいては、死者への鎮魂碑文が発展し、やがて偉人を讃える紀功碑文に発展したと考えられるが<sup>(99)</sup>、テュルク世界に数多く広がる英雄叙事詩こそ、この紀功的性格を強くもつ「草原文学」の典型であることは言うまでもない。シャマンが語った、死んだ偉人や英雄の言葉は、英雄叙事詩へと進化・発展を遂げたのである。おそ

らく、シャマンは、死者や神の言葉を伝える役割とともに、英雄叙事詩を語る役割も担うようになったのであろう。ここで改めて、シャマンを意味したバクスが詩人・語り手を表すようになった理由を考えると、そこにはバクスの役割の変化がある。イスラーム化が草原地域よりも相対的に早く、深く進んだ中央アジア南部で、バクス／バフシが本来のシャマンの意味をほとんど失い、やがて叙事詩語りを示す言葉に特化したのである。

## おわりに

テュルクの口承叙事詩には、シャマンがしばしば登場する。テュルク世界において「最初のシャマン」と伝えられるコルクトがその代表的な例である。また、『エル・トシュテュク』で勇士トシュテュクが地下世界に降りて、敵と戦い、聖鳥に乗って地上世界に戻ってくる様は、シャマンの巫術と重なり合い、英雄叙事詩の主人公にシャマンの姿が投影されているとも考えられる。叙事詩に「シャマンの他界旅行」の痕跡が具体的に認められるのである。トシュテュクが馬で地下世界に降下し、聖鳥に乗って地上世界に帰還することは、アルタイ・シャマンの儀式的記録と合致する。このことについてエリアーデは「あやしい矛盾点」と指摘するが、叙事詩の内容を考慮すれば、これは「一種の混淆」などではないことが明瞭であろう。

またトシュテュクの愛馬が八本脚であると暗示されていることも確認され、これは世界各地に見られるシャマン的典型的八脚馬と同列に見なすことができる。叙事詩に見られる馬の毛を焼く場面は、シャマニズムの呪術で呪的動物を呼び起こすことをまさに反映していることも確認できた。

古来のテュルクの伝承では聖樹の存在が大きい。『エル・トシュテュク』には、大地の中心にある、天空までそびえ立つ大樹が描かれる。この聖樹は、異界と異界を結び付ける世界樹としての役割をもっていることが明瞭であり、テュルクの聖樹信仰が叙事詩に表れている好例といえよう。

本来シャマンを意味していたバクスという言葉が叙事詩の語り手を意味するようになったのは、バクスの果たす役割が変化したためと考えられる。祖霊がシャマンに憑依して語った言葉がテュルクの口承文学の源泉であるならば、その言葉がやがて英雄叙事詩へと発展し、バクスによって語られるようになる一方で、預言や託宣を行う機会が減少した結果、叙事詩語りとしての働きが中心となったのであろう。

今後は、シャマニズムと馬、とりわけ世界各地にみられる「八脚馬」について、さらに検討を続けるとともに、北欧神話等における世界樹と中央ユーラシアに伝承される世界樹との関わりについても考えていきたい。世界各地の神話世界を考える上で、中央ユーラシアの伝承は大きな鍵となるはずである。

富者エレマンに8人の息子がいた。妻が懐妊し、9番目の男の子が誕生した。この子は二日経たずに「お母さん」といい、6日経たずに「お父さん」といった。白い髭の老人がそこに現れ、こういった。「胸（肉）を食べた諸兄よ、自分の胸を食べよ、と申します。神のご慈悲があるようにエル・トシュテュクといたしましょう！」と名づけられた。

ある日、トシュテュクが盗まれた馬を追っていくと、ベクトロという邪悪な女の小屋に行き着いた。彼女は彼に、馬は見つかるだろうと予言し、小屋に泊まるよう勧めた。夜中にトシュテュクが目覚めると、恐ろしい娘はとても美しくなっていた。彼はベクトロに誘惑されるが、馬を取り戻し、それに乗り家に戻った。

トシュテュクが帰宅すると、父は彼のために妻を捜しに出かけた。父エレマンもまたベクトロに出会い、もてなされた。それから父は旅を続け、トシュテュクの妻として、アガイ・ハンの9人の娘の末娘ケンジェケを迎えた。ケンジェケは、夫に贈るための名馬チャルクイルクとラクダ、チャル・インゲン、黒毛の雌馬、下女クイトウ・クンを父に求めた。ベクトロはケンジェケを自分の恋敵と考え、トシュテュクの家に向かう道中、ケンジェケを毒殺しようとした。しかし彼女はこれに気づき、企みは失敗した。ベクトロは、この世界ではトシュテュクをケンジェケに譲ることにするが、別の世界では彼を渡さないといい放つ。

ケンジェケがエレマン一行に追いついたとき、彼らは禁じられた木の下に宿営していた。エレマンは邪悪な精霊・妖婆ジェルモグス・ケンピルに捕まった。そして助けて欲しければ、息子トシュテュクの魂をジェルモグスに渡すように言った。トシュテュクの魂は「五徳の下に隠された黒い鋼のヤスリ」であった。ジェルモグスに見つからぬよう、ケンジェケはその砥石をトシュテュクに取りに行かせた。トシュテュクは、名馬チャルクイルクと毛皮を妻からもらい、出発した。トシュテュクとジェルモグスのヤスリを巡る戦いが始まった。トシュテュクはヤスリを取り戻した。ジェルモグスは応戦したが、チャルクイルクに足を引き千切られる。ジェルモグスは大きな黒い石を蹴ると、地下世界に入った。トシュテュクはチャルクイルクに乗って、彼女を追いかけた。

トシュテュクが地下の世界に降りたとき、地下の世界はぐらりと揺れた。そこには巨人アイクラクがいた。二人はつかみあった。40の山脈を越える巨人をトシュテュクは投げ飛ばした。頭を斬りおとしてトシュテュクは去っていった。ジェルモグスがクルム・カンの町に行ったと知り、トシュテュクはクルム・カンの元に向かった。トシュテュクの強さを知り、クルム・カンは玉座を彼に譲り、娘を娶らせ、盛大な祝宴をあげる。そしてクルム・カンは、ジャンタクチという敵が毎年攻めてきて、馬を盗むため、困っていることを花婿に告げ、ジャンタクチを成敗するように依頼する。クルム・カンのために、トシュテュクは出陣し、ジャンタクチを攻め、彼を持ち上げて、ケンピルのいる家に投げつけた。



逃げたジェルモグスは、次にウルム・カンの家に駆け入った。ケンピルを追ってきたトシュテュクの強さを知ったウルム・カンは彼に玉座を譲り、娘アクチェネムを嫁がせた。ウルム・カンはカシャン・カラ・アルプという仇敵を倒すよう依頼した。トシュテュクは出陣した。だが、チャルクイルクは疲れ果て、もう進めないと訴えた。チャルクイルクの8つの魂のうち3つの魂が死んでしまったが、5つの魂は生きていた。震えながら立ち上がり、カシャン・カラ・アルプのところに行った。戦いが始まった。カシャン・カラ・アルプをトシュテュクは持ち上げ、大地に打ちつけた。その首を切り落とした。そしてその民を服従させた。彼らをウルム・カンのところへ移住させた。

その後、トシュテュクは地下世界のチョユンクラクと戦った。チョユンクラクはトシュテュクを持ち上げ叩きつけ、その頭を斬りおとした。トシュテュクの国を自分のものとし、アクチェネムを抱いた。アクチェネムはチョユンクラクの息子を生んだ。チャルクイルクに乗りまわし、チャルクイルクが疲弊すると捨てた。チャルクイルクは、トシュテュクの死んだ場所に向い、彼の遺骸を見つけた。チャルクイルクはそれを飲み込んで、それからそれを吐き出した。するとトシュテュクは蘇った。彼はアクチェネムと再会した。

チョユンクラクの留守宅にトシュテュクは入り、子供の揺りかごの下に穴を掘った。揺りかごに寝ている子供をトシュテュクは錐で突いた。子供が泣くと、チョユンクラクは尋ねた。「何で泣いているのだ？私の魂をおまへの魂と一緒に隠そう。私の魂はアルタイクの地にある。そこには金の泉がある。その泉の中には黄色いジャユン魚がいる。黄色い魚の中には金のサンドウク（長持）がある。金のサンドウクの中には銀のサンドウクがある。銀のサンドウクの中には40の黒い小鳥のわが魂がある。それをおまへの魂と一緒に隠そう！」。これを聞いたトシュテュクは、その40羽の黒い小鳥を取り出した。39羽の小鳥の頭を斬りおとし、一羽だけを残した。チョユンクラクは「金と銀を与えよう。私の魂を返しておくれ！」と懇願した。だが、トシュテュクが鳥の頭を引き抜くと、チョユンクラクは死んでしまった。アクチェネムを白いラクダの乳で身を清めさせ、二人は再び婚礼の儀を行った。

彼らは大地の真ん中にやってきた。一本の木（チュナル・テレク：ブラタナスの一種）が生えていた。その頂は天空にまで延びていた。そこには一匹の竜（アジュダル）がいた。その木の上にはカラクシュ鳥の二羽の子供がいた。トシュテュクは竜を小刀で真っ二つに斬った。やがて黒い嵐が起こり、母鳥が戻ってきた。彼を見たカラクシュは、トシュテュクを飲み込んで、また吐き出した。トシュテュクはこの鳥に地上に連れ出すよう頼んだ。カラクシュは同意した。首にトシュテュクを乗せ、40頭のヤギ肉と皮袋に水を積み、背中に40の隊商と二人の妻を乗せて飛び立った。飛んでいる間、ヤギの肉と革袋の水をカラクシュの口に入れてやった。肉と水がなくなると、トシュテュクは自分の片目と腿の肉を切り取り、カラクシュ鳥の口に与えた。カラクシュは40回旋回すると、地上に出た。カラクシュはトシュテュクに「わが子のようなトシュテュクよ、困ったことがあったら、この羽を火で焦がすと私が出現します」と言った。それからトシュテュクを飲み込み、吐き出した。ト

シュテュクの目玉と腿はもとに戻っていた。そしてカラクシュは飛び立って、地下の世界に入ってしまった。

トシュテュクは髭を生やした老ムッラーの姿をして故郷に戻った。トシュテュクは両親やケンジェケと再会した。ケンジェケの懷でトシュテュクは寝て、二人は空を漂う蜃気楼になった。ケンジェケとトシュテュクは、来世まで仲睦まじく過ごした。

— 注

- (1) 本稿では、英語由来の「シャーマニズム」ではなく「シャマニズム」と表記する。理由は、ウノ・ハルヴァ著、田中克彦訳『シャマニズム 2』平凡社、東洋文庫、294、316、322 頁。
- (2) 荻原眞子「勇者たちの世界——ユーラシアの英雄叙事詩から」『ユーラシア諸民族の叙事詩研究 3』千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 148 集、23 頁。
- (3) 佐々木宏幹「シャーマニズム」『歴史学事典第 11 巻 宗教と学問』弘文堂、305 頁。
- (4) 護雅夫「突厥の信仰——とくにシャーマニズムについて」『三上次男博士喜寿記念論文集 歴史編』平凡社、317 頁。
- (5) 「隋書突厥伝」『騎馬民族史 2』平凡社、東洋文庫、41 頁。
- (6) 「新唐書回鶻伝下」『騎馬民族史 2』平凡社、東洋文庫、452 頁。
- (7) Kaşgarlı, Mahmud (Çeviren Besim ATALAY), *Divanü Lügat-it-Türk 3*, Ankara, 2006, 157.
- (8) カルピニ、ルブルク著、護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』桃源社、15 頁。
- (9) 同上、177 頁。
- (10) 護雅夫『遊牧騎馬民族国家』講談社現代新書、114 頁。護雅夫「突厥の信仰」、311 頁。
- (11) Малов С.Е., *Памятники древнетюркской письменности*, М.Л., 1951, 81.
- (12) テュルクの部族連合。中央アジア、シル川流域から西アジアへと移動し、セルジューク朝やオスマン朝を起こした。
- (13) 菅原睦・太田かおり訳『デデ・コルクトの書』平凡社、東洋文庫、2003 年、21 頁。
- (14) 中央ユーラシアに伝わるコルクトについて詳しくは、拙稿「死から逃れようとする賢者——テュルク世界の伝説的人物コルクトについて」永澤峻編『死と来世の神話学』2007 年、言叢社を参照。
- (15) 菅原睦・太田かおり訳『デデ・コルクトの書』平凡社、東洋文庫、2003 年、311 頁。
- (16) *Ногай Халк ырылары*, Москва, 1969, с.81-87.
- (17) 拙稿「地下世界で戦う勇士——中央ユーラシアの英雄譚『エル・トスティク』から」篠田知和基編『異界と常世』楽郷書院、424 頁。
- (18) カザフ語では、ジャルマウズ。
- (19) ジンとは、中央ユーラシアの悪魔・悪鬼的存在。
- (20) Ер Төстік: *Қазақ әдебиеті энциклопедия*, Алматы, 1999, 228-6.
- (21) Кайыпов, Сулайман, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Төстүк»*, Фрунзе, 1990, с.196.
- (22) *Женщина в мифах и легендах*, Ташкент, 2008, с.111.
- (23) *Бабалар сөз 75: Батырлық ертегілер*, Астана, 2011, 368-6.
- (24) 詳しくは、拙稿「地下世界で戦う勇士——中央ユーラシアの英雄譚『エル・トスティク』から」篠田知和基編『異界と常世』楽郷書院、414-415 頁。
- (25) Радлов, В.В., *Из Сибири*, Москва, 1989, с.373.; Вербицкий, В.И., *Алтайские инородцы. Сборник этнографических статей и исследований*, Москва, 1893, с.48.
- (26) Вербицкий, В.И., *Алтайские инородцы*, 48, ミルチア・エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム上』、ちくま学芸文庫、326 頁。
- (27) 加藤九祚「中央アジアのシャマニズム」、226 頁。
- (28) エリアーデ『シャーマニズム上』、362 頁。

- (29) 護雅夫「イエニセイ碑文に見える“säkiz adaqïy barïn”」『日本大学人文科学研究所紀要』32号、1986年43ページ。
- (30) ウノ・ハルヴァ『シャマニズム2』、237頁。
- (31) İnan, Abdülkadir, *Tarihte ve bugün şamanizm*, Ankara, 1986, s.104-105.
- (32) İnan, Abdülkadir, *Tarihte ve bugün şamanizm*, Ankara, 1986, s.241.
- (33) ミルチア・エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム下』、ちくま学芸文庫、285-6頁。
- (34) 同上、286頁。
- (35) 同上、285-6頁。
- (36) Ер Төстік, *Ертегілер 4*, Алматы, 1989, 19-6.
- (37) МаловМ.С., *Енисейская письменность тюрков*, М.Л., 1952, с.26. 30.77., 護雅夫「イエニセイ碑文に見える“säkiz adaqïy barïn”」、32頁。
- (38) Аманжолов, А.С., *История и теория древнетюркского письма*, Алматы, 2010, 125-6.
- (39) 護雅夫「イエニセイ碑文に見える“säkiz adaqïy barïn”」、42頁。
- (40) 同上、50頁。
- (41) エリアーデ『シャーマニズム下』285頁。
- (42) 同上。
- (43) 同上、148-9頁。
- (44) Қондыбай, Серікбол, *Арығықазақ мифологиясы 1*, Алматы, 2004, 387-6.
- (45) エリアーデ『シャーマニズム下』285頁。 *Бабалар сөз 75*, 368-6.
- (46) Кайыпов, Сулайман, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Тейитюк»*, с.216.
- (47) *Бабалар сөзі 78 : қазақ мифтері*, Астана, 2011, 259-260-б.
- (48) Сонда да。
- (49) Қондыбай, Серікбол, *Казахская мифология 5*, Алматы, 2008, 106-107-б.
- (50) Қондыбай, Серікбол, *Казахская мифология 1*, Алматы, 2008, 25-б.
- (51) *Алтайский эпос Маадай-Кара*, Москва, 1973, с.68.
- (52) Кайыпов, Сулайман, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Тейитюк»*, с.292.
- (53) Вербицкий. В.И., *Алтайские инородцы*, с.46.
- (54) Эриарде『シャーマニズム上』、217-219頁。
- (55) 同上、220頁。
- (56) 同上、451-452頁。
- (57) 突厥の君主一族の名称。
- (58) 「周書突厥伝」『騎馬民族史2』平凡社、東洋文庫、30頁。
- (59) Эриарде『シャーマニズム上』、332-333頁。
- (60) 護雅夫『遊牧騎馬民族国家』講談社現代新書、114頁。護雅夫「突厥の信仰」311頁。
- (61) 斎藤英喜「シャーマニズムとは何か」『シャーマニズムの文化学』森話社、18頁。
- (62) 山田信夫「『ウイグルの始祖神話』について」『北アジア遊牧民史研究』東京大学出版会、95-106頁。
- (63) Ögel, *Türk mitolojisi 2*, s.482.
- (64) Эриарде『シャーマニズム下』、148-9頁。
- (65) Radlov, *Из Сибири*, Москва, 1989, с.359.
- (66) Там же。
- (67) Вербицкий. В.И., *Алтайские инородцы*, с.70.
- (68) Radlov, *Из Сибири*, Москва, 1989, с.359.
- (69) Вербицкий. В.И., *Алтайские инородцы*, с.73-74.
- (70) Там же, с.63.
- (71) Там же, с.64.
- (72) Анохин, А.В., *Материалы по Шаманству и Алтайцев*, Ленинград, 1924, 1.
- (73) Радлов В.В., *Образцы народной литературы Тюркских племен живущих в южной сибир и Дзунгарской*

степи 1, СП, 1866, с.164-165.

- (74) エリアーデ『シャーマニズム上』、338 頁。
- (75) 資料での原語はカム。
- (76) Потанин, Г.Н., *Очерки Северо-Западной Монголии* 4, СПб, 19883, с.65-68. エリアーデ『シャーマニズム上』、339-340 頁。
- (77) エリアーデ『シャーマニズム上』、343 頁。
- (78) Қондыбай, Серікбол, *Қазақ мифологиясына кіріспе*, Алматы, 2008, 322-б.
- (79) ウノ・ハルヴァ『シャマニズム 1』、287 頁。
- (80) 同上、286 頁。
- (81) 『カラ・ココル』のタシュ・カンの魂の例。 Радлов В.В., *Образцы народной литературы Тюркских племен живущих в южной сибире и Дзунгарской степи* 4, СП, 1872, с.70.
- (82) Кайыпов, Сулайман, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Тёштюк»*, с.205.
- (83) エリアーデ『シャーマニズム上』、368 頁。
- (84) 荻原「ユーラシアのウマイ女神」、579-580 頁。なおこのオミは中央ユーラシアの母神ウマイと深い関係があると考えられる。
- (85) 拙稿「地下世界で戦う勇士」420 頁。エリアーデ『シャーマニズム上』、368 頁。
- (86) エリアーデ『シャーマニズム上』、369 頁。
- (87) この 8 つの魂は、本稿第 2 章で取り上げた「八脚馬」から連想されるものであろう。
- (88) *Бабалар сөз* 75, 368-6.
- (89) 齋藤君子『シベリア神話の旅』三弥井書店、12 頁。
- (90) ウイグルでは、「バフシ、まじない師」と「語り手、語り部」の双方の意味がある。菅原純編『現代ウイグル語小事典』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2009 年。
- (91) Валиханов, Шокан, *Избрание произведения*, Москва, 1986, с.229.
- (92) 迪木拉提・奥迈尔「当代哈萨克的萨满教信仰—仪式及其变迁」迪木拉提・奥迈尔編著『无萨满时代的萨满』民族出版社、北京、2010 年、5-18 頁。
- (93) Бартольд В.В., *Сочинения том5*, Москва 1968, с.501.
- (94) *Древнетюркский словарь*, Ленинград, 1969. с.82. 加藤九祚「中央アジアのシャマニズム」加藤九祚編著『日本のシャマニズムとその周辺』日本放送出版協会、231 頁。
- (95) 護雅夫『草原とオアシスの人々』三省堂、221 頁。
- (96) 同上、265 頁。
- (97) 岡部隆志「近現代文学とシャーマニズム」『シャーマニズムの文化学』森話社、228 頁。
- (98) 加藤九祚「中央アジアのシャマニズム」、227 頁。
- (99) 護雅夫『草原とオアシスの人々』、199-266 頁。
- (100) Кайыпов, Сулайман, *Проблемы поэтики эпоса «Эр Тёштюк»*, Фрунзе, 1990. に基づく。